

いつも週の初めに

コリント人への手紙第一 16章 1-9節

はじめに

私が月の第二週に説教をさせていただく時は、「コリント人への手紙第一」からお話しています。今日の聖書箇所には、「聖徒たちのための献金」について書かれています。

1. 聖徒たちのための献金

「聖徒たちのための献金」というのは、エルサレム教会のクリスチャンたちのための献金のことです。というのは、エルサレム教会のクリスチャンたちは、経済的に貧しい人たちが多かったようです。エルサレムは、ユダヤ教の中心地です。ですからエルサレム教会のクリスチャンたちは、ユダヤ教徒たちから激しい迫害を受けていました。暴力的な迫害もありましたが、経済的な迫害もあったようです。クリスチャンであるがゆえに、仕事を失ったり、家族から勘当されたりする人も多く、経済的に厳しい状況に追い込まれていたようです。ですからエルサレム教会は、創立当初から「**一つになって、一切の物を共有し、財産や所有物を売っては、それぞれの必要に応じて、皆に分配していた**」(使徒 2:44-45)と「使徒の働き」に書かれています。つまり経済的に余裕のある信徒たちが、自分の財産や所有物を売って、経済的に貧しい信徒たちの生活を支えていたのです。

そのような状況に追い打ちをかけるように、世界中に大飢饉が起こるのです。エルサレム教会のクリスチャンたちは、その影響を大きく受けて、経済的な貧しさはより一層深刻な状況になったのです。そこでパウロを中心とするアジアやヨーロッパの教会は、エルサレム教会のクリスチャンたちのための献金を募り、支援することにしました。

エルサレム教会は、アジアやヨーロッパの教会の母教会でした。キリスト教会は、エルサレム教会からアジアやヨーロッパへと広がっていったのです。その意味で、アジアやヨーロッパの教会は、エルサレム教会の恩恵に与っていたのです。パウロは、アジアやヨーロッパの教会は、エルサレム教会から霊的なものを与えられたのだから、物質的なものでエルサレム教会を支えるべきだと説いて(ローマ 15:27)、献金を呼びかけたのです。

パウロが、アジアやヨーロッパの教会にエルサレム教会への献金を呼びかけたのは、もう一つの理由があります。それは、ユダヤ人教会と異邦人教会の一致のためです。ユダヤ人を中心とするエルサレム教会の中には、異邦人を中心とするアジアやヨーロッパの教会に警戒心を持っている保守的な人たちがいました。福音がユダヤ人から異邦人に広まり始めた過渡期だったからです。そのような中で、異邦人教会がユダヤ人教会を経済的に支えることを通して、異邦人教会は真の教会であること、異邦人教会とユダヤ人教会は一つの教会であることを示そうとしたのです。

私たちも、自分の教会のことだけを考えていてはなりません。私たちから見ると、教会はいくつもあるように見えますが、神様から見れば、教会は一つしかありません。私たちは、他の教会と一つであることを示していかなければなりません。特に、神奈川中会の諸教会と一つであること、日本長老教会の諸教会の一つであること、日本の他教派の教会と一つであること、世界の諸教会と一つであることを示していかなければなりません。

私たちの教会は、エルサレム教会のように、神奈川中会の諸教会から経済的な支援を受けています。それは、神奈川中会の諸教会が、私たちの教会と一つの教会であることを示してくれているからです。私たちは、物質的なもので支えられているのですから、霊的なもので神奈川中会の諸教会を支えていかなければなりません。神奈川中会の諸教会のために祈ることもそうでしょう。また神奈川中会が主催する行事があるなら、積極的に参加することもそうでしょう。私たちは、支えられるだけでなく、自分たちのできることを通して、他の教会を支えていかなければなりません。そのようにして、教会は一つであることを示していかなければなりません。

2. 献金をどのように集め、届けるか

2 節を見てみましょう。「**私がそちらに行ってから献金を集めることがないように、あなたがたはそれぞれ、いつも週の初めの日に、収入に応じて、いくらかでも手もとに蓄えておきなさい**」。ここでパウロは、コリント教会に、エルサレム教会のクリスチャンたちのための献金をどのように集めるべきかを具体的に指示しています。

第一に、パウロが来てから慌てて献金を集めるのではなく、いつも週の初めの日に献金を集めて、パウロが来るまで蓄えておくようにということです。ここから、コリント教会は「いつも週の初めの日に」集まっていたことが分かります。おそらくコリント教会は、毎週日曜日に集まって礼拝を行っていたのでしょう。パウロは、その毎週の礼拝の時に、エルサレム教会のクリスチャンたちのための献金を集め、パウロが来るまで少しずつ蓄えておくようにと言うのです。

ここから教えられることは、献金は、その場で慌てて衝動的に献げるのではなく、毎週の礼拝において、計画的に献げていくべきであるということです。「収入に応じて」とあるように、自分が与えられた毎月の収入の中で、どれだけ献金を献げるかを祈りつつ自分で決めて、毎週の礼拝の中で、計画的に献げていくのです。

第二に、「それぞれ」「収入に応じて」とあるように、パウロはコリント教会の全員が、エルサレム教会のクリスチャンのための献金に参加することを求めています。しかしパウロは、各自がどれだけ献げるかについては「収入に応じて」とあるように、各自に任せています。パウロは、Ⅱコリント 9：6-7 でこう言っています。「**わずかだけ蒔く者はわずかだけ刈り入れ、豊かに蒔く者は豊かに刈り入れます。一人ひとり、いやいやながらでなく、強いられてでもなく、心で決めたとおりにしなさい。神は、喜んで与える人を愛してくださるのです**」。献金は、決して強制ではありません。一人ひとりが祈りつつ、喜んで献げられる金額を決めるべきなのです。

献金は、無計画に衝動的に献げるものではなく、祈りつつ計画的に、喜びをもって、毎週の礼拝において継続的に献げるべきものなのです。

3-4 節を見てみましょう。「**私がそちらに着いたら、あなたがたの承認を得た人たちに手紙を持たせてエルサレムに派遣し、あなたがたの贈り物を届けさせましょう。もし私も行くほうがよければ、その人たちは私と一緒に行くことになるでしょう**」。パウロは、コリント教会で集めた献金を、自分でエルサレム教会に届けようとは考えませんでした。そうではなくて、コリント教会で集めた献金は、コリント教会の中で承認を得た人たちに届けさせようとしたのです。そして、必要があれば、パウロも一緒に行くという程度でした。

パウロは、お金を扱うのに、細心の注意を払っているのです。パウロは、Ⅱコリント 8：20-21 でこう言っています。「**私たちは、自分たちが携わっているこの惜しみないわざについて、だれからも非難されることがないように努めています。主の御前だけでなく、人々の前でも正しくあるように心がけているのです**」。パウロは、献金に関しては、誰からも非難されることがないように、人々の前でも正しくあるように心がけ、努めているのです。そのため、献金を扱う人は、教会で承認を得た人たちであるべきだと考えたのです。また決して一人ではなく、複数であるべきであり、教会で選ばれた信頼できる人たちでなければならないと考えたのです。

私たちの教会も、集められた献金は、教会員によって選ばれた「執事たち」が扱います。しかも一人ではなく、必ず複数で扱います。そして、誰からも非難されることがなく、人々の前でも正しくあるために、毎年行われる教会員による総会で、決算報告の承認を求めます。このように教会は、献金を扱う際には、誰からも非難されることがないように、また人々の前でも正しくあるように、細心の注意を払う必要があるのです。

3. 私たちの計画と主の計画

パウロは、パウロがコリントに行くまで、エルサレム教会のクリスチャンたちのための献金を日曜日の礼拝ごとに集め、蓄えておくようにと言いました。では、パウロはいつ頃、コリントに訪れる予定なのでしょう。5-9 節には、今後のパウロの旅の予定が書かれています。「**私はマケドニアを通過して、あなたがたのところへ行きます。マケドニアはただ通過し、おそらく、あなたがたのところに滞在するでしょう。冬を越すことになるかもしれません。どこに向かうにしても、あなたがたに送り出してもらおうためです。私は今、旅のついでにあなたがたに会うようなことはしたくありません。主がお許しになるなら、あなたがたのところにしばらく滞在したいと願っています。しかし、五旬節まではエペソに滞在します。実り多い働きをもたらす門が私のために広く開かれています、反対者も大勢いるからです**」。

パウロは、この手紙を「エペソ」で書いています。パウロは今後、五旬節まではエペソにいて、マケドニアを通過して、コリントに行くという旅の計画を立てています。マケドニアというのは地方の名前で、その地方には、ピリピ教会やテサロニケ教会がありました。ですからパウロは、アジアにあるエペソ教会からヨーロッパに渡り、ピリピ教会やテサロニケ教会を途中で訪問し、コリント教会に行こうとしていたのです。しかもコリント教会には、長い

期間、滞在しようと考えていたのです。

これがパウロの旅の計画です。しかしパウロは7節で、「主がお許しになるなら、あなたがたのところにしばらく滞在したいと願っています」と言っています。つまりパウロは、旅の計画はあくまでも自分の計画であって、神様がその計画をお許しになるなら実現するだろうと言っています。パウロは、計画は立てますが、その計画を何が何でも実現しようとするのではなく、最終的には神様に委ねるのです。最終的には、自分の計画よりも、神様のご計画、神様の御心を尊重するのです。

旧約聖書の「箴言」には、次のような言葉があります。「**あなたのわざを主にゆだねよ。そうすれば、あなたの計画は堅く立つ**」(箴言 16:3)「**人の心には多くの思いがある。しかし、主の計画こそが実現する**」(箴言 19:21)。私たちは、人生の様々な場面で計画を立てることは大切です。聖書は、無計画で生きるより、計画的に生きることを勧めているように思います。しかし同時に、自分の計画に固執することも戒めているように思います。計画を立てることは大切ですが、その計画に固執するのではなく、最終的には神様にお任せする、委ねることが大切なのです。この世界で起こるすべての事、私たちの人生に起こるすべての事は、神様のご計画によって導かれているということ、私たちは忘れてはなりません。

4. **実り多い働きをもたらす門が広く開かれる時**

パウロは9節で、五旬節までエペソに留まる理由について語っています。それは、「実り多い働きをもたらす門が広く開かれている」からであり、「反対者も大勢いる」からです。エペソでは、迫害も激しかったようですが、同時に伝道も豊かな実を結んでいたようです。

パウロは、伝道がよく進んでいることを、「門が開かれる」と表現します。つまり、神様が伝道の門を開いてくださる時、人は多く救われていくのです。ここから教えられることは、伝道は決して、人間の業ではなく、神様の業であるということです。伝道の門は、いつでも開かれているわけではありません。開かれている時もあれば、閉ざされている時もあります。パウロは、神様が伝道の門を開いてくださっている機会を、決して見逃しませんでした。パウロは、その機会を十分に生かして、じっくり伝道したのです。

パウロは、「コロサイ人への手紙」の中でこう言っています。「**たゆみなく祈りなさい。感謝をもって祈りつつ、目を覚ましていなさい。同時に、私たちのためにも祈ってください。神がみことばのために門を開いてくださって、私たちがキリストの奥義を語れるように祈ってください。…外部の人たちに対しては、機会を十分に活かし、知恵をもって行動しなさい**」(コロサイ 4:2-5)。私たちは、伝道の門が開かれるために、祈らなければなりません。伝道の門が閉ざされている時には、神様がその門を開いてくださるように祈り、伝道の門が開かれている時には、その機会を見逃すことなく、十分に生かして伝道しなければなりません。

コロナ渦の中で、教会の活動も制限され、伝道の門が閉ざされているようにも思えます。しかし神様は、必ずその門を開いてくださる時が来るはずで、その門が開かれるように祈り、開かれた時にはその機会を見逃さず、十分に生かして伝道しなければなりません。

天におられる私たちの父なる神様。

あなたの教会は一つです。教会は互いに支え合って、一つであることを示していかなければなりません。私たちの教会にできることを通して、他の教会を支えていけますように。

また私たちは、神の国の働きのために献金を献げます。私たちは、決して無計画に衝動的に献金をすることなく、あなたから与えられた収入の中から、祈りつつ、喜びをもって、計画的に、毎週の礼拝において献げていくことができますように。また献げられた献金が、誰からも非難されることなく、人々の前で正しく扱われるようにお守りください。

あなたは、私たちに無計画に生きるのではなく、計画的に生きることを求めておられます。しかし私たちはいつでも、永遠の昔からあるあなたのご計画があることをわきまえることができますように。計画的に生きつつも、あなたのご計画に任せ、委ねる信仰をも与えてください。

コロナ渦の中であって、あなたが伝道の門を開いてくださいますように。どうか私たちを通して、あなたの御言葉が多くの人に宣べ伝えられることができますように。私たちがあなたから与えられた機会を見逃すことなく、十分に生かすことができますように。

この祈りを私たちの救い主イエス・キリストの御名によってお祈りします。アーメン。